

令和5年度広島広域都市圏地域貢献人材育成支援事業

⑤文化財・伝統文化の活用・保全

子どもたちによる「壬生の花田植」の創造的な継承に関する調査

広島文化学園大学 学芸学部 音楽学科 永井 美由紀
参加学生6名

I 研究の背景と目的

「壬生の花田植」は、広島県北広島町で毎年6月の第一日曜日に開催される民俗芸能である。田植えとともに音楽が奏され、田の神にその年の稲の豊作を祈願する目的で行われている。そこには、地域の方々と壬生小学校の児童や教員が一丸となって「壬生の花田植」を継承する取り組みがある。伝統的な民俗芸能や民俗音楽は地方の過疎化や後継者不足により存続の危機が叫ばれる一方で、学校教育においては「総合的な学習の時間」の創設以降、地域や学校の特色に応じた学習活動を行うこととして、地域社会とつながり特色ある学校づくりが求められ、全国各地で積極的に地域の民俗芸能を学校教育の場に持ち込んできたという流れがある。さらに中学校音楽科においては平成10年の学習指導要領改訂から「郷土の伝統音楽」の学習の充実を図ることが求められ、今後より一層身近な「郷土の伝統音楽」への関心は高まっていくと考える。

「壬生の花田植」は中学校音楽科の教科書に掲載されながらも、民俗芸能や民俗音楽を教材とするには、そもそも教師がこれを知らなかったり体験したことがなかったりするため、どのように授業を構想し実践すればいいのかといった教師の指導に関する課題がある。このような課題を解決するためには、教員を目指す学生が広島県の民俗芸能や民俗音楽の魅力や味わいを肌で感じ、地域と学校がどのように関わり合って伝承しようとしているかを知ることを通して考えを深めていくことによって可能であると考えられる。

そこで本研究では、北広島町の民俗芸能である「壬生の花田植」を伝承する活動に着目し、学校教育と「壬生の花田植」の関わりの実際や地域の方々の取り組みについて調査することを通して、壬生小学校の子どもたちの継承の様子を明らかにすることを目的とする。

今回の調査活動により、学生が民俗芸能や民俗音楽を理解し、自分自身がどのように関わっていくのかについて考え、学校現場で活躍する教員となることを期待したい。

II 活動の概要

- 予備調査…「壬生の花田植」の現地調査
- (1) 「壬生の花田植」の地域と学校の関わりの実際について調査
- (2) 地域の田楽団の方々へのアンケート調査
- (3) 講師（東海学園大学准教授 横山真理氏）を招聘して研究会を実施

Ⅲ活動の内容

○予備調査…「壬生の花田植」の实地調査

民俗芸能や民俗音楽は、日常生活に寄り添って信仰や風俗習慣と結びつきながら伝承されてきた主に専門家ではない一般の人々によって演じ奏される芸能や音楽を指す。



今回の研究に参加した学生のほとんどが民俗芸能である「壬生の花田植」を知らなかったため、予備調査として令和5年6月4日（日）に北広島町を訪問し、現地で「壬生の花田植」を鑑賞した。その後、各自が「壬生の花田植」の歴史・文化的背景や音楽などについて調べたことをまとめプレゼンテーションし、互いに意見を交流しあい理解を深めた。

(1)「壬生の花田植」の地域と学校の関わりの実際について調査

「壬生の花田植」は毎年6月の第一日曜日に開催される。壬生小学校の五年生は子ども田楽を披露するため、ちょうど一年前の四年生7月から翌年6月へ向けて練習に取り組む。調査より明らかとなった今年度（令和5年度）の壬生小学校第四学年における活動内容を以下に示す。

○活動の流れ

- ①上級生から「壬生の花田植」の基礎を教わる（第四学年1学期）
- ②地域の方々から「壬生の花田植」を習得する（第四学年1・2学期）
- ③運動会や壬生ふれあい秋まつり等で発表する（第四学年2学期）
- ④学習したことや身に着けた技能を下級生へ伝承する（第四学年3学期・第五学年1学期）
- ⑤6月の第一日曜日に発表する（第五学年1学期）

○担当楽器と人数

楽器名	人数
サンバイ	2名
大太鼓	5名
小太鼓・手打鉦	2名
早乙女	6名

○指導の場と発表の場



- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・指導の場…大人田楽による指導・総合的な学習の時間・発表の場…学校内（運動会・デモ演奏発表）
学校外（正寿園、あけぼの慰問発表・6月第一日曜日・壬生ふれあい秋祭り・ひろしま小学生バンドフェスティバル） |
|---|

○指導の場

指導の場	日時	内容
大人田楽による指導	7月と9月の月曜日と金曜日 19時半～	子どもたちは、地域の大人田楽の方々から直接指導を受け、田楽を習得する。指導者は、若い方から熟練の方まで多様な年齢層が参加している。また集団指導の形をとる。上級生や大人と継続的に取り組み、実践者として成長していく。
総合的な学習の時間	毎週金曜日	教師も指導者となり、児童とともに練習を進める。教師はICT機器を駆使し、田楽の様子をその場で録画し、子どもたちは教師の録画した演奏を視聴し、自分たちの田楽を振り返る。また、児童は職業観を意識したうえで自分の目標をイメージする学習や下級生へ伝承する活動などを取り入れている。

○発表の場

発表の場	日時・場所	内容
正寿園・あけぼの慰問発表	令和5年 5月26日(金) 正寿園・あけぼの	地域の老人施設を訪問し、子ども田楽を披露する。
「壬生の花田植」 	令和5年 6月4日(日) 北広島町 壬生の花田植会場	「壬生の花田植」の披露の前に、壬生小学校第五学年の児童による子ども田楽が「壬生の花田植」を披露する。また、金管バンドとコラボレーションした楽曲も演奏する。
「壬生小学校運動会」 	令和5年 10月7日(土) 北広島町立 壬生小学校運動場	7月から練習に取り組んできた成果を初めて発表する場である。保護者や地域の方へ向けて「壬生の花田植」を披露する。
第27回 壬生ふれあい秋祭り 	令和5年 11月12日(日) 北広島町立 壬生小学校体育館	「壬生の花田植」の衣装を身に着け、地域の秋祭りで発表を行う。衣装は大人田楽団の方々と児童の保護者とが合同で児童の着付けを行う。 会場からは、大きな拍手と暖かい声援が送られる。

<p>「デモ演奏発表会」</p> 	<p>令和6年 1月12日(金) 北広島町立 壬生小学校体育館</p>	<p>児童会が中心となって、翌日に控えたひろしま小学生バンドフェスティバルのデモ演奏を全校の前で披露する。児童同士が演奏についての感想を伝え合う中で、下級生へ伝承されていく。</p>
<p>第45回ひろしま小学生バンドフェスティバル</p> 	<p>令和6年 1月13日(土) 広島市文化交流会館 広島文化学園 HBG ホール</p>	<p>H B Gホールで開催されるひろしま小学生バンドフェスティバルに参加し、金管バンドと「壬生の花田植」がコラボレーションし作曲された楽曲を披露する。</p>

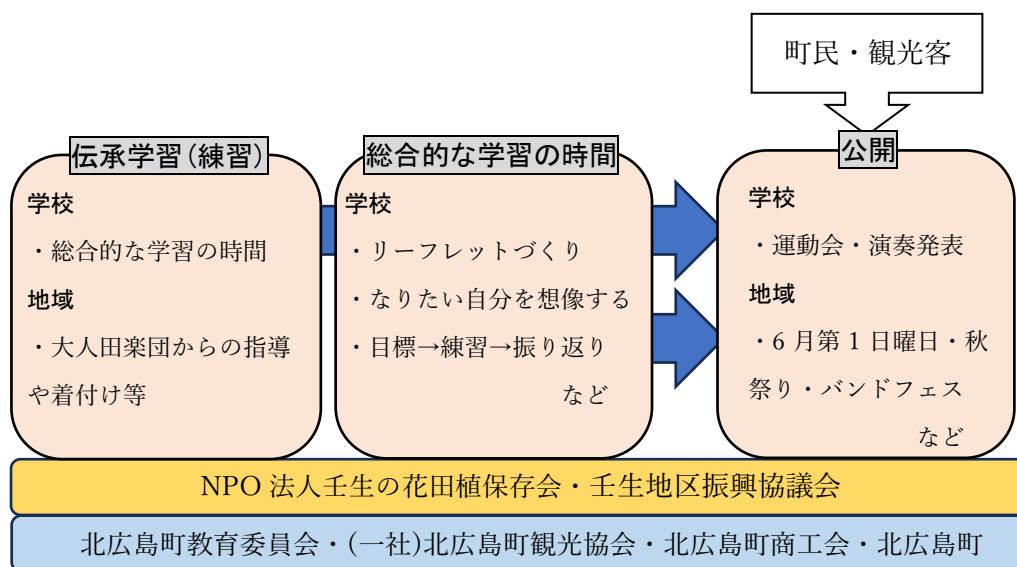


図1 壬生の花田植の伝承

(2) 地域の田楽団の方々へアンケート調査を実施

アンケート調査からは、地域の田楽団員の方々からの「壬生の花田植」や子ども田楽に対する思い、これからの「壬生の花田植」に期待することなどの回答があった。SCATによる分析をし、以下に示す。

- ・伝承者は、[過疎化への不安]を抱えているため、「壬生の花田植」が[心のよりどころとしての伝統芸能]の役割となることを期待する。
- ・人口減少や都市部への人口流出による[地域コミュニティ存続の危機]があるために、[脱地域社会化とコミュニティの拡大化]が引き起こされる。

- ・江戸時代から続く伝統を受け継ぎ保守するといった「オーセンティックな壬生の花田植」を継承するという概念がある一方、伝承者は「開かれた伝統芸能の継承」の方法に積極的な興味と関心を示す。
- ・「壬生の花田植」は、学校と地域社会が一体となり継承する中で、伝統芸能そのものが地域社会を創出する「伝統芸能のコミュニティ・ミュージック化」を起こす役割を担う一方で、「伝統芸能の存在があるが故の地域コミュニティ存続の危機」を内包する。
- ・「学校教育における課外活動としての子ども田楽」は、過疎化による「民間伝承の限界」から平成元年ごろから活動が始まり、幅広い年齢層による「地域交流の場」として機能し、「教育的効果」をもたらす。
- ・伝承者は、「後継者育成の可能性の追求」を行っており「伝統芸能を継承する目的に内在化する地域への愛着と後継者育成への期待」がある。
- ・郷土愛を基盤とした「故郷としての壬生の花田植」の存続を願う伝承者は、「子ども田楽存続への感謝」や「学校制度への共感と感謝」をもつ。

(3) 講師（東海学園大学准教授 横山真理氏）を招聘して研究会を実施

横山真理氏（東海学園大学准教授）をお招きし、研究会を実施した。これまでの調査の成果について報告し、民俗芸能や民俗音楽を学校教育の場で学ぶことの意義について、また音楽科だからこそ学習できる教科内容についての意見を交流し考えを深めていった。横山氏が大学生のころは、日本の音楽について学ぶどころか触れる機会は皆無だったことを踏まえ、学校教育の場であるからこそ「郷土の伝統音楽」を学ぶ機会を保証できるという説明があった。また授業では、グループ活動により対話的・協働的に学習を進める学習方法や授業の中にICTを活用していくことは、もはや令和の時代の学校教育におけるスタンダードになりつつあり、音楽の見方・考え方を働かせた授業を構想し実践していくことで「郷土の伝統音楽」を含めた幅広いジャンルの音楽に触れ、児童生徒の音楽の価値観を広げ深めていくことの重要性について助言があった。

学生はこれまでの調査を振り返り、ICTを教師や児童が使いこなしている様子や自分たちの田楽に誇りをもって主体的に学習に臨んでいる児童の様子を見て最初驚きがあったが、調査を通して、地域の民俗芸能や民俗音楽を学校教育の場に持ち込み、地域と学校が関わり合って民俗芸能を継承していくことの必要性を理解し、これからの学校教育に求められていくものと考え、残りの学生生活で教員を目指すうえで身に着けなければならない課題を明確にしていった。

IV おわりに

研究活動を終えて、学生の感想の一部を紹介する。

○総合的な学習の時間の授業観察について

田楽を通して自分自身ができるようになりたいことを交流する学習では、田楽を自分自身とつなげて考えることで、郷土への誇りを感じている児童の様子が印象的でした。最初のころは、演奏や振りを覚えることで一杯いっぱい、練習の様子からも自信がないように感じましたが、授業の中で田楽を通してなりたい自分の姿を想像し、自己の考えを学級で交流したあとの練習では、真剣な顔つきに変わり、担当楽器やパートへの責任感が生まれ成功させたいという子どもたちの気持ちが様子から伝わってきました。

壬生小学校の児童にとって「壬生の花田植」は、教科書に載っているようなほかの民俗芸能では感じることはできない、特別な感覚をもっているものであると考えます。教科書に載ったり受け継がれたりしている音楽にはそれに値する味わいがあります。地域の特色や学校の特色を生かした他にはできない学習だと感じ、地域に誇れるものがあること、伝承していくことができることをうらやましく思います。

○「壬生の花田植」の魅力について

「壬生の花田植」は最初、きらびやかに着飾った牛が町中を歩くことで、これから田植えという特別な行事が始まるという気持ちの盛り上がりを感じたり、町の人へアピールすることにつながったりするのではないかと考えます。調べていく中で、神様に豊作を祈願する意味があることがわかりましたが、それ以外にも田植えという肉体労働を音楽にあわせて行うことで楽しく楽にできるという背景があることを知りました。みんなで支え合って協力する気持ちの表れがこの「壬生の花田植」の魅力のひとつになっていると考えます。

児童の学習の様子を観察する中で、誰かを「助けられるようになりたい」という意見があり、子どもたちは「壬生の花田植」を継承する活動の中で、壬生の花田植の成立の背景を自然と感じ取っており、学校で学ぶにも理に適っていると思います。自分たちにしかない地域のものだと思うと団結力が生まれるのだと思います。

○学校と地域との関わりについて

学校と地域が関わり合って活動することは、希望者をつのるより格段に伝承しやすく、地域の大人が関わり直接教わることで縦のつながりが生まれ、地域の交流の場となるのが良さであると感じました。一方で限られた時間数の総合的な学習の時間において、他の学習内容とどのように折り合いをつけていくかについては課題があると感じました。

「壬生の花田植」は田植をみんなで盛り上げてやっという支え合いの精神に、ほかの民俗芸能にはない良さがあります。私自身、広島出身でありながら北広島町へ行ったことがなく遠くに感じていましたが、調査研究を通して「壬生の花田植」を知るうちに物理的な距離は変わっていませんが、感覚的に身近に感じています。「壬生の花田植」を知った今、広島にはこのような素晴らしい民俗芸能があると自信をもって言えます。

○音楽科と民俗芸能の関わりについて

私自身が感じた「壬生の花田植」の良さを紹介するため音楽科授業で取り入れるには、鑑賞で取り入れ授業をすることが考えられます。民俗芸能は実際に受け継がれているものなので、当事者の人がそこにいます。どんな気持ちで行っているのか、どのように伝承しているかにもスポットを当ててみる事が考えられます。このような授業をすると民俗芸能を身近に感じられると思います。子どもたちにとって自分の地域以外の民俗芸能や民俗音楽を扱った鑑賞授業は、身近でないという点で教科書に載っているクラシック音楽と同じくらいの印象にしかならないかもしれませんが、継承している人々がこういう気持ちで行っているのかもしれないと想像し共感することで、身近に感じられるようになると思います。

例えば、他の地域で「壬生の花田植」を授業で扱い、子どもたちが音楽的な魅力や良さを味わうことができたなら、自分たちの地域の民俗芸能について興味をもつと思います。そういった経験をもつ子どもたちは自分と地域との関わりにも目を向けていくだろうし、結果的にその地域が活性化していくことにもつながっていくものであると考えます。日本の音楽は学校で習わないと知らないことも多くあるからこそ教育の場で日本の伝統音楽を取り上げ、生徒が見聞きし触れる機会をつくりたいです。私自身が教員として教壇に立つ時には、西洋だけではなく日本の音楽も授業に取り入れていきたいと思っています。

V 活動の記録

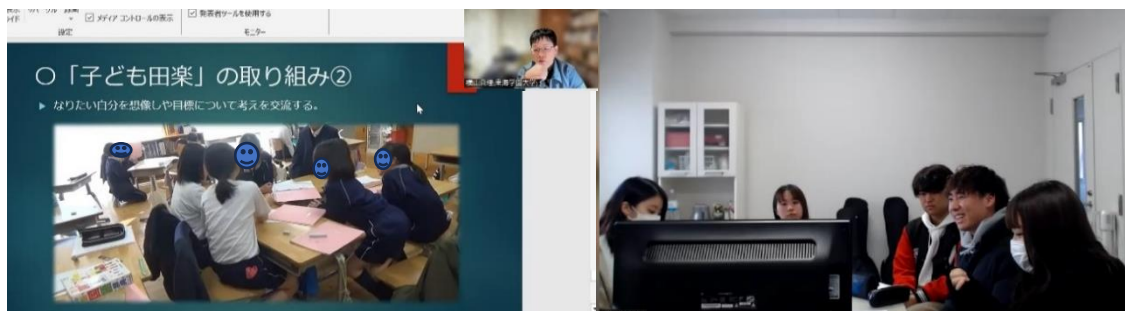


写真1 ハイブリッド形式の研究会で講師の先生と学生が意見交流する様子



写真2 バンドフェスティバル参観



写真3 芸北民俗芸能保存伝承館で記念撮影